

平成 24 年度 第 3 回 石狩市社会教育委員の会議 議事録

(要点筆記)

日 時 平成 25 年 3 月 13 日 (水) 午後 2 時～3 時 50 分

会 場 石狩市公民館第一研修室

出席者 委 員 長：木村純

副委員長：大橋修作

委 員：相馬保、石井量子、山田治己、佐久間有里、青木昭子、宮田あゆみ、大黒利勝、
平紀子、高橋美恵子

事務局 生涯学習部：部長 百井宏己

社会教育課(兼公民館)：課長 東信也、主査 樋口潤作、主任 前野加代理、主任 青山直史

社会教育主事：西山隆之(兼社会教育課主任)

傍 聴 無し

会議内容

1 木村委員長あいさつ

皆様、年度末のお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。まだ雪が残っておりますが、石狩でもこの時期にこれだけ雪が降ったのは珍しいことと思います。北大でも昨日試験が終わった途端に雨が降りました。次年度に向けて、社会教育委員として楽しく取り組める企画を考えていきたいと思いますので、今日はよろしくお願いします。

2 研修報告

① 平成 24 年度地域生涯学習活動実践交流セミナー(2 月 14 日～15 日、札幌市)

(大橋副委員長より報告)

2 月 14 日と 15 日の 2 日間、かでの 2. 7 で開催され、全道から社会教育主事や社会教育関係者が参加し、実践交流が行われました。今回のテーマは、新しい公共の担い手を育む社会教育行政のあり方ということで、道内 4 ブロックからの研究報告がありました。その中で 3 つのキーワードが示されており、1 つ目は「目的重視」で、何年も同じ事業を続けると形骸化しがちであるが、事業の内容を目的や現状に沿ったかたちにしていかなければならないということでした。2 つ目は「双方向性」であり、事業へのアプローチ段階で、行政からの提示だけではなく、住民からの提案という形の双方向性が重要であるということでした。3 つ目は「ゆるやか」という、誰でも気軽に参加できる環境という、きっかけづくりが必要であるということでした。

江差町の「世代間交流～子どもたちと地域のつながりを目指して～」という事例発表では、小学校の余剰教室を使って高齢者大学を実施しており、学園祭に児童と地域の方が一緒に参加しているとのことでした。石狩市でも、厚田の文化祭には小学生も参加しており、似た事例だと感じながら聞いておりました。余剰教室を使うということは、学校行事との重複が生まれることから、学校側の理解が必要になりますけれども、江差町の場合はそれがうまくいっていると話されていました。

他にも事例がいくつかありましたが、特別講演として、四国、新居浜市の泉川校区の公民館運営について話されていました。新しい地域づくり、新しい公民館を目指してというテーマでしたが、いわゆる懐かしい昔ながらの公民館が地域の核になっている事例でした。この事例で特徴的だったのは、今までの行政依存型ではなく、住民主体の公民館づくりがこれから大切であるという視点でした。住民が自らの手で、自分たちにできることから始める、というのがスタートだったそうです。石狩市も含めて全道各地で色々な課題がある中で、いかにして新しい担い手を育てていくか、それが最も重要であると実感しました。

②平成 24 年度社会教育関係事業実施報告 （西山社会教育主事から資料に基づいて報告）

木村委員長：ブックマーチを実施しているNPO法人ひとまちつなぎは、どんな活動をしておりますか。
西山主任：毎年 12 月の「石狩こだわり師走市」や、花川北コミュニティセンター内にある、石狩市市民活動情報センターの運営、また同センター内における図書の貸し出し等も行っております。

3. 議題

①平成 25 年度 主要な社会教育事業の概要

②平成 25 年度 社会教育関係予算案について（樋口主査から資料に基づいて報告）

山田委員：生涯学習講座開催事業の欄に、いしかり市民カレッジについての記載がありますが、主催講座の他に、まちの先生企画講座として、5 講座 15 回の開催を予定しております。また、市民カレッジは、市から予算の補助は受けておりません。ただし、資料印刷などの現物支給で支援をいただいております、この事業費 50 万円のうち、15 万円分がその部分になります。

木村委員長：とてもコストパフォーマンスの高い事業であるということがわかりますね。資料館運営管理事業の中で、石狩大学とありますが、これは市民カレッジと連携しているのでしょうか。

東課長：市民カレッジの連携講座になっております。

相馬委員：新規事業の子どもの体力向上事業ですが、これは具体的にどういった事業でしょうか。学校の中での活動などはあるのでしょうか。

東課長：この事業は協働事業となっており、NPO法人こども・コムステーション・いしかりから提案を受けて取り組みを進めることになると思います。対象は幼児のほか、少年団などもこの事業を活用していくということです。学校の中でというよりは、教室的な事業展開になるのかと思います。石狩市の子どもの運動能力については、全道的に見ても厳しい水準にありますので、ひとつの方策として始まった事業と考えられます。

樋口主査：幼児を対象としたコーディネーション運動が 1 コース 5 回で組まれており、小中学校の教員を対象とした講座も 1 回予定されております。このNPO法人には指導員がおり、あい風寺子屋教室にも参加いただきました。

木村委員長：色々なところでNPO法人と協働して取り組まれているのが、石狩市の特徴だと思います。

百井部長：このNPO法人は、こども未来館の運営管理をしており、コーディネーション運動については今年度から同館において既に取り組まれております。その発展版として、市民を対象とした事業を提案したということです。

相馬委員：新規事業として子どもの体力向上事業があげられておりますが、これに関連して、石狩市にはラジオ体操の協会もしくは連盟などというものはあるのでしょうか。

東課長：協会については、現在は無いと伺っております。

相馬委員：ラジオ体操では、1級、2級などの指導員がおりますが、石狩市ではどのようなになっておりますでしょうか。

樋口主査：スポーツ健康課に、2級の指導員がおりまして、広報等でラジオ体操の普及について周知をおこなっております。

大黒委員：「あつた水彩画展芸術文化振興事業」において、継続実施となっておりますが、昨年度も平成25年度と同額の予算が計上されていたのでしょうか。

東課長：平成24年度については、地域づくり基金として2,400千円が予算計上されており、実行委員会の総予算額としては、自己資金800千円と合わせて、計3,200千円となっております。また、平成25年度についても、前年度と同様、地域づくり基金から258千円が予算計上されており、実行委員会の総予算額としては、自己資金258千円と合わせて、計516千円となっております。なお、予算額が異なるのは、水彩画展の開催が隔年実施となっており、平成25年度は募集期間にあたるため、それに係る経費として計上しているものです。

木村委員長：アクアレールとは水彩画という意味かと思いますが、これは以前から実施されていたのでしょうか。

大黒委員：平成23年度から募集をかけて、平成24年度に第1回の展覧会を開催しました。その後は隔年実施となりますので、次は平成26年度に第2回の展覧会を開催します。

木村委員長：アクアレール実行委員会とありますが、水彩画の愛好者が厚田に多くいらっしゃるのか、何か他に日常的な活動はされているのでしょうか。

大黒委員：この水彩画展1つに専念しております。公募対象は全国なので、これからさらに広めようとしております。

百井部長：この水彩画展には、地域振興の一環としての意味合いもあります。

樋口主査：今年度の市民文化祭において、厚田と石狩の交流として、アクアレールの入賞作品数点を南コミセンの展示会場に出展していただきました。

山田委員：双葉小、南線小、緑苑台小には学校図書館がありますね。制度上12学級以上の学校には司書教諭を置くことになっており、例えば恵庭市などは全校に司書教諭を置いておりますが、石狩市はどのような状況でしょうか。平成25年度から花川南小に司書を置くがありますが、図書館の厚田分館が閉館となり、厚田小内にリニューアルオープンした経緯を考えると、むしろ厚田小にも司書を置く必要性が出てくるのではないかと思います。

木村委員長：学校図書館の充実に関する事業が、社会教育関連事業の一環として捉えられておりますが、石狩市では当初からこういう考えだったのでしょうか。

百井部長：石狩市は、市民図書館が学校図書館と連携して、市全体における読書活動など本に関わることについては、市民図書館が中心になって進めていこうという考え方を持っています。本来は学校教育と社会教育の違いはありますが、市全体の図書行政は市民図書館が担い、学校教育も

社会教育も一緒になって進めるという方針にまとまりました。

山田委員がおっしゃいました司書の配置については、石狩市の場合は学校司書と呼んでおりまして、市民図書館に勤務経験があり、市全体の図書行政について理解している職員を学校に配置することで、連携しやすい環境を整えることができます。また、人員体制的にも、図書館が一括して所管したほうがスムーズに進められると考えております。

厚田については、厚田分館を廃止し、厚田小の中に地域開放型図書館を開設しました。その際、厚田分館に勤務していた職員2名をそのまま配置しております。この2名については、地域の方を採用しており、残念ながら司書資格はありませんが、これまでの経験や自己研鑽も含め、司書相当の知識と技能を持っております。

平委員：司書教諭は各学校に配置されているのでしょうか。

百井部長：法律で定められている司書教諭と、石狩市が考えている学校司書とは別のものです。司書教諭は学校に配置しておりますが、現実には司書教諭が専属で学校図書館に関われる状況にないため、市が学校司書を置いて支援しようという考えを持っております。

平委員：市民図書館を中心とした図書館資料のネットワーク化とありますが、これは市民図書館と緑苑台小、花川南小とが結ばれているということでしょうか。

百井部長：そのとおりです。

平委員：図書館システム更新事業というものが記載されておりますが、このシステム更新にあたって、将来的には市全体の図書をネットワーク化する構想をお持ちなののでしょうか。

百井部長：はい、そのとおりです。

平委員：その中心が市民図書館で、学校司書をハブとして、各学校とのコミュニケーションを図るということですね。

百井部長：全校がオンラインになりますので、学校間の図書のやりとりも将来的には可能になるのではないかと考えております。

平委員：今、発達障がいのある子どもたちへのケアが重要になってきています。そういった児童の中には、とても図書館が好きな子が多くいるなど、司書が担う役割が多様化してきていると言われておりますが、その点も視野に入れているのでしょうか。

百井部長：その分野を特別に考えているわけではありませんが、学校図書館の役割として、単に子どもたちに本を読んでもらうだけではなく、学校の授業支援や、先生方の支援をしていくという役割もありますので、特別支援の先生やお子さまを含めた活用が今後考えられると思います。

平委員：発達障がいのある子どもたちに図書館が好まれる理由として、書架の規則性などが馴染みやすいのだと言われているそうです。

木村委員長：図書館行政の一元化については、私も賛成ですが、財源の心配があります。今の社会教育にかかる財政は、全体として学校支援や子育て支援に傾斜していて、むしろ社会教育事業を学校

支援にシフトしないと、予算がつかないような状況になっています。石狩市のように、社会教育行政の中で学校図書館の充実を図る場合に、ただでさえ少ない社会教育予算の多くを使ってしまうことにならないか、という心配があります。それとも図書費は別に確保されているのでしょうか。

百井部長：ご心配は良くわかります。従来から行われている社会教育事業はどんどん見直されており、学校支援が目的でなければなかなか予算がつかないという現状も聞いております。しかし、石狩市の場合は、教育行政だけではなく、市全体で子どもたちを育てようと、財源が限られた中で、いかに効率的に予算を使うかという視点で進めておりますし、社会教育予算を削ってまで、学校教育に投入するという考えにはなっていないと感じております。学校図書館への取り組みは、子どもに視点を当てて、これを機会に、社会教育行政に関心を持っていただくひとつのきっかけになるのではないかと感じております。

木村委員長：枠組みとしてはとても賛成ですが、いしかり市民カレッジの予算は15万円ですので、コストパフォーマンスは良いのですが、もう少し予算があれば、と率直に思いました。

百井部長：確かに、受益者負担や自主的運営といった側面がありますので、心配がないという訳ではありません。

木村委員長：そのことについては、私としても大学側の支援など、できることを考えたいと思います。

③ 次年度の社会教育委員の会議における取り組みについて

木村委員長：それでは次の議題に移ります。前回の第2回目の会議において、石狩市の社会教育委員の会議における、今までの取り組みと、今後どう取り組んでいくべきかについて、徳田 前委員長からご講話をいただきました。

そのあとの全体討議の中で、石狩市が抱えている課題、特にコミュニティの実態について、各委員からご意見をいただきまして、社会教育委員の会議でどう取り上げていくか考えましようとして申し上げましたので、私の方で案を作りました。社会教育委員の会議自体は回数が限られており、委員報酬の関係もありますので、社会教育委員だけで学習・討議をするのではなく、市民に公開して講座として実施し、その中で社会教育委員と市民の皆さんにも参加していただきながら、石狩市の課題と、市民がどんな学習をしていく必要があるのか議論していくために、案をもとに皆さんにお諮りしたいと思います。前回の話し合いの中で、例えば日常的な住民同士のあいさつ、ゴミ等のマナーなどのコミュニティの現状と、問題を解決するために、どんな市民活動があるのかについて、学んでみてはどうかと私から提案いたしました。

できれば、冬ではなく、夏から秋の天候の良い時期にかけて、できるだけ多くの人に参加していただけるような時間帯ということで、現時点では6回くらいの講座を開催してはどうかと考えておりました。その際のテーマと、講師の候補についてご覧いただければと思います。

おそらく石狩市の場合は、高齢化に関する顕著な事例として、農村・漁村地帯の過疎化が進んでいる地域と、団地造成で同時期に高齢化を迎えた地域の、大きく2つの様相に分けられると思います。全国的には、孤独死、孤立死、無縁死などが問題になっており、見守り活動が大切だと言われておりますが、石狩市の高齢化地域では、今どんなことが問題になっているのかについて話して、皆さんで議論するというのも考えられると思います。特に厚田、浜益は旧石狩地区以上に過疎高齢化が進んでいるので、その現状なども話し合ってみてはいかがでしょうか。講師が一人あたり15分程度で複数の方に話していただき、その後、参加者全員で議論し合う形ではいかがでしょうか。厚田、浜益については、大黒委員、相馬委員ご自身も講師の候補として、適任な

方がいらっしゃるか、ご検討をお願いします。

もうひとつ、ごみの問題としては、石狩湾新港や工業団地と、町内会などのコミュニティとの2つがあると思います。例えば、私が住んでいる札幌駅周辺の町内会は、単身者や学生が多く、マナーやルールが守られないという問題がありますが、町内会が色々と解決の工夫をしているという経緯があります。他のテーマとしては、子育て支援や学校支援があります。特に子育て支援については、石狩市の場合はNPO法人の活動や市民活動が活発です。行政から少し石狩市の現状についてお話いただいた上で、NPO法人から市民活動などについて話していただけると良いのではないかと思います。地域と学校支援の問題についても、色々な市民活動があると思います。それから、コミュニティの問題を考える場合、石狩市は合併しておりますので、厚田・浜益・石狩での新たなアイデンティティをどう確立し、また地域交流をどう深めていくかという課題があります。そのためには、厚田・浜益のコミュニティが今一体どうなっているのかを知る必要があります。高齢者や子育ての話が中心になりがちですが、未来の地域の担い手である、若い人たちがどのような活動をしているかも重要ですし、私自身も知りたいと思っています。

今提案しているテーマは6つですが、講座という形で6回開催するのが良いのか、もしくは厚田浜益の問題をひとつにしてテーマ全体を総括的にまとめ、パネルディスカッションやシンポジウムをするのが良いのか、色々議論の余地があります。財源に乏しいので、遠方から専門家をお呼びすることは難しいと思いますが、もしかすると北大の生涯学習計画研究部門が共催という形で、何らかの協力ができるかもしれません。

なお、現時点ではあくまでまだ案の段階ですので、他に講師として相応しい方や、テーマや回数、時間帯などについて、皆さんからご意見をいただきたいと思います。1回あたり2時間程度とした場合、講師も複数いた方がいかもしれません。コーディネーターも必要ですから、私自身できることはさせていただきたいと思いますし、社会教育委員の皆さんにも役割分担して協力いただければと思います。

もし6～7月位から始めるとした場合、内容を決める期限もありますし、社会教育委員の会議の中だけで結論を出すのは難しいかみせんので、本日皆さんからいただいた意見を踏まえて、私と事務局とで調整させていただきますが、委員の皆様にご協力いただけるだけ参加いただきたいと思いますので、ご意見ををお願いします。

青木委員：私は仕事柄、幼稚園に長く勤務しておりますが、日常の中で色々と感じることがあります。私が保育を始めた頃、3歳児でおしめをしてくる子どもはいませんでした。現代では、4歳半ばになってもおしめがとれない子どもがいますし、保護者から朝の挨拶をされたことはまずありません。また、広汎性発達障がいのある子どもたちが増えており、言葉が出ない、会話ができないという状況が見られます。発達障害の原因が生まれつきなのか、育つ過程にあるのか、はっきりしないのだそうです。そういう子どもたちを育てなければならない立場にある保護者の方に、もっと親としての大切なことを、NPOの事業や、学習の場を通して学んで欲しいと思います。しかし、そういう場に出られる親はいいのですが、出られない親が本当に多くて、そんな環境の中で育つ子どもたちが多いという実態を、声を大にして言いたいのですが、なかなか難しいのです。家庭の中でも、親が子どもにいつも蹴飛ばされているなんて話も聞きましたし、これから世の中に出ていく子どもたちには、もう少ししっかりと成長して欲しいと思います。個人的には、先生方や教育にたずさわる方々が、子どもに遠慮し過ぎているからこういった状況になっているのではないかと思います。

木村委員長：ありがとうございます、とても大切なご意見です。今考えている講座企画は、教育を始めとして今どんなことが地域の課題になっていて、それを解決していくためにどんな取り組みが必要か、そしてどんな学習が必要かを考える講座なので、まさに今お話いただいたような議論を、皆さんと一緒に話して、意見を共有するという場にすることが大切です。今のご意見をふまえると、例えば「地域ぐるみの子育ての現状と市民の活動」というテーマにした場合、活動の現状だけではなく、乳幼児の発達や、子どもたちが今どんな状態にあるのか、ということについての報告もあった上で、市民の活動についてどんなものがあるかという構成にするという方法もありますね。

案では講師が複数おりますが、1人の時間を短くして、専門家が行政担当者をお呼びする案もあ

ります。まさに今、こういうことが大変なのだという課題が出されて、それについて一緒に考える、というのが効果的かと思います。最終的には、講座を全て録音して、年度の最後までに報告書として作成できれば、社会教育行政的にも、社会教育委員の学習の成果とすることができます。市民カレッジの連携講座にもできれば、なお良いですね。

山田委員：前回の会議で、高橋委員から、社会教育委員として何をすればよいのか、という意見がありました。社会教育の計画を立てる、諮問に答えるなどの役割もありますが、社会教育委員の役割の一つとして、市民の学習機会充実の手伝いをするということがあります。石狩市には、北大の教授や学校関係者などをはじめ、地域の知財というべき、色々な知識を持った方が大勢います。いしかり市民カレッジがスムーズに進んでいるのもそういったお陰だと思います。もうひとつには、市民として、あまり自治体に頼りすぎないことも大切だと思います。社会教育委員の会議でも、行政にあまり頼らず、自分たちの発想で進めていった方がいいのではないかと思います。

木村委員長：頼るというより、協働の学びとして提案したいと思っています。石狩市内の地域、市民生活の現状などについて、最も情報を持っているのが行政ですから、その情報をもとに、地域の課題について一緒に考えていくという方法が良いのではと思います。もっとも、地域の中に適切な助言ができる専門家がいれば、その方でも構わないと思います。

山田委員：案にあるテーマは、全て石狩市に関わりが深い課題だと思います。市内の高齢化については、65歳以上の世代が24%を超えており、27年度には30%を超えと言われております。厚田、浜益はもっと高くなっております。また、市内には独居の高齢者が三千人いるそうです。ごみの問題、子育ての問題もあります。地域ぐるみでの学校支援についても、むしろ学力支援も必要になっていくくらいだと感じています。その一環としてサイエンスアイが活動しており、毎回20人ほどの子どもが参加するのですが、そのうち大半が札幌市からで、石狩の子どもたちの参加が少ないのです。いしかり市民カレッジも中学生向けの講座などを開いていますが、参加する子どもの多くは札幌市民という実態があります。

しかしながら、こういう学習機会は市民にとって必要です。私たち社会教育委員がまず学習しなければならぬですし、年3回の会議にこだわると動けませんので、検討してはいかがでしょうか。

木村委員長：講座の中で学んだことを元にしながら、社会教育委員の会議でも話し合う、という進め方も良いと思いますね。

相馬委員：社会教育委員の役割や必要性については、全道の研究大会などに参加した中で、以前から言われ続けておりました。先程委員長がおっしゃっていたように、会議を開くと委員報酬が発生するため、回数には限りがあります。しかし、本当にまちのために何かをやろうとするならば、無報酬でもできると思います。また、社会教育は社会教育委員、学校教育は教育委員がやるものだという見方をしている教育委員が大半である、と全道の研究大会で言われておりましたが、教育委員と社会教育委員が一緒に取り組んでいくべきではないでしょうか。社会教育委員は、地域の中に入って行って、住民と色々な関わりを持ちながら自分も勉強していくこと、その在り方こそが大切だと思います。会議の中で事業や予算の審議をするだけでは、社会教育委員は必要ないと言われてしまいます。管内の他の自治体では、教育委員と社会教育委員が同じテーブルについて協議しているそうです。また、先程の学校図書館と市民図書館の連携の例もあります。教育委員と社会教育委員とが繋がるということは、学校教育と社会教育が繋がることにもなると思いますし、これからの社会教育委員の在り方にも繋がるのではないのでしょうか。

木村委員長：教育委員と社会教育委員は、年に1度くらい、意見交換の場があるといいですね。今回の企画の中で、教育委員の方も一緒に参加していただいて、皆で議論することができると良いですね。日常的な交流が深まり、率直に意見を言える環境ができると良いと思います。

各委員からいくつか意見をいただきました。活動の現状について聞くだけではなく、地域の知識・見識をお持ちの方や専門家を招いて、例えば子どもや高齢化の現状がどうなっているか、そういう話をしていただけるといいですね。勿論、予算面で負担にならないようなやり方ができるかも含めて、皆さんから知恵をいただきたいと思います。

高橋委員：私の考えとしては、例えば高齢化やコミュニケーションなど、ひとつのテーマだけに絞って、3～4回でやってみるのはいかがでしょうか。町内会などに的を絞り、講師も毎回変わっていくと面白いと思います。ある程度の期間やってみて、地域の様子の変化がわかると面白いですね。

木村委員長：もう少しテーマを絞った方がいいということでしょうか。

高橋委員：子どもや高齢者も含めた、もう少し広いテーマにしたほうが良いと思います。若い人の参加をいかに促すかが問題ですし、独居の高齢者がどのようにコミュニケーションをとっているのかなどの実態も知る必要があるので、地域の繋がりを重要視して、テーマを「コミュニケーション」としてはいかがでしょうか。

石井委員：先日のニュースで知りましたが、旭川市でワールドカフェのようなものを行っていると同じました。今までそれぞれ個別になっていたものを、何とか繋げて共有化したいと考えた方がいたようで、呼びかけたところ色々な方が集まってきて、医療、福祉、介護などの横の繋がりができたそうです。そういう簡単な呼びかけの方が、気楽に来られるのでは、と感じました。

木村委員長：テーマと対象さえ決まれば、どういう手法で進めるかについては、ワールドカフェやワークショップなども考えられますが、運営側の負担も大きくなります。皆さんでそれぞれ役割を分担するのであれば、色々な手法を考えることは可能です。先程山田委員がおっしゃったように、社会教育委員の役割として、計画づくりも重要であるということもありますので、石狩市の現状がどうなっていて、どんな課題があり、それを解決するために市民がどんな学習を進めなければならないのか、という結論を得ることが、最終的な目標でもあると思います。参加した市民の中で色々な繋がりができたり、地域の問題を考え始めるきっかけになれば良いですし、教育委員と社会教育委員の課題共有ができたりといった効果が期待できるかもしれません。その際に、コミュニケーションをテーマにすると、少し進め方が難しいかなと思いますが、いかがでしょうか。勿論、テーマを1つに絞って、学習の進め方を工夫するのも可能かもしれません。

高橋委員：地域の人が参加したくなるような魅力あるテーマでなければ、参加者が集まらないのでは、という心配があります。

相馬委員：昔は親父の集まりというものがあったのですが、浜益も合併前から人口が減っておりまして、参加者もすっかり減り、しばらく開かれておりませんでした。そこで、また集まりを開こうと、私が社会教育関係団体などに呼びかけたことがありました。テーマも、講師も無かったのですが、思いのほか人が集まりました。参加者からは、楽しかったという感想が聞けましたし、参加すること自体を目的とした、こういうやり方もあるのかと感じました。むしろ村長や教育長などの偉い方を呼んでいたら、人は集まらなかったと思います。私としては、参加者は多数である必要はなく、本当に意欲を持った人たちが、10人でも20人でも集まってくれば良いと思っています。

木村委員長：私は、多くても 30 人くらいかなと考えておりますが、6 回の講座の他に、もっと大勢が集まれる場を設けるのも良いと思います。少しテーマを絞った方が良いとも感じますし、最初から欲張りすぎではという意見もあるようですので、もう少し案をもとに考えたいと思います。次の会議はいつ頃を予定しておりますか。

東課長：5 月頃を予定しております。

木村委員長：7 月頃から始めるのであれば、5 月の会議で諮ってもいいですね。ただ、会議ですぐに決まるとも思えませんので、皆さんに意見を求めながら事務局とも調整したいと思います。

大橋副委員長：会議の持ち方ですが、社会教育委員の会議のほかに、市民も参加して話し合える場があればよいと思います。個人で感じている課題なのか、それとも地域全体の課題なのかがそこでわかる訳です。除雪の問題にしても、個人で役所に言えばクレームになりますが、住民が集まって共通認識を持てば、それは地域の課題であり、そこから解決方法を考えれば、そのあとの動き方が変わってきます。この 6 つのテーマは、それぞれ 1 回の講座では解決しないだろうし、また別の新たな問題が出てくるかもしれませんから、問題発掘の場として貴重だと思います。最初は参加者もそれほど集まらないかもしれませんが、この場に行けば、自分の考えていた課題を話せる、ということがわかれば、参加者も広がるのではないかと思います。

大黒委員：委員長案の 6 つのテーマというのは良いと思いますが、類似したテーマ 2 つを合わせるとか、やり方は色々あると思いますので、アイデアを出していきましょう。

木村委員長：できれば講師の方に事前ヒアリングができるといいですね。

山田委員：社会教育委員の活動は、コミュニティづくりであるべきですし、テーマは地域に根差したものであるべきだと思います。ただ、参加者にしてみれば、毎回参加できるとは限らないので、内容が連続するよりも、1 回ごとに完結したほうが良いと思います。

佐久間委員：私もこの講座企画については賛成です。青木委員がおっしゃっていたように、幼稚園児の保護者が挨拶をしないという現状を聞いて驚きました。私も幼稚園から高校まで 14 年間、PTA 活動に関わってきましたが、今は時代が変わってきたと実感しています。親が挨拶できなければ、子どもが挨拶できないのも当たり前だと思います。そういうことに私たちが気付いて、何をすれば良いのか考えたいと思います。今は子どもに声をかけると何かと不安がられる時代ですが、あまり気にせず、家の前を通る子どもたちに声をかけていくことが必要だと思いました。さらにもう少し踏み込んで、私たちが挨拶以上に、何を発信すれば良いのかを考えられる講座になると嬉しく思います。

木村委員長：講師には市民活動の実践者だけではなく、幼稚園や保育園の保育士の方に現状を話していただき、お互いの理解を深めるのも良いですね。

高橋委員：大人は子どもの鏡だといいますが、大人が挨拶しないから子どもが挨拶できなくなっているのですよね。大人がきちんと行動して子どもの見本になる必要があります。

相馬委員：浜益も子どもが少なくなっていますが、下校中の子どもに声をかけたところ、無視されたことがありました。それは、知らない人から声をかけられても無視しなさい、と教わっているからなので

す。挨拶と身の安全とどちらをとればよいのか、子どもたちも学校側も大変なのだと思います。

佐久間委員：コミュニケーションは挨拶から始まると思うのですが、なかなか大変な世の中ですね。

木村委員長：話をする中で、そうだったのかという気付きがあり、そこからどうしていけば良いのかと発展していくこともありえますね。講座の実施にあたって、委員の皆様の都合の良い時間を、事務局の方で個別に調査をお願いできますでしょうか。この企画は皆さんと一緒に楽しく立ち上げていきたいと思しますので、よろしくお願いします。

百井部長：今日のお話は大変参考になりました。社会教育委員の役割において、計画作りも重要な役割のひとつです。石狩市においても、現在、5ヶ年計画である石狩市教育プランの3年目にあたり、平成25年度に計画作りに入る必要があります。計画作りにおいては調査などが重要ですが、今日の議論をうかがうと、今までは書面上の調査だったものを、実際に学びをとおして課題を発掘していこうという、非常に良い取り組みであると感じました。

それと、教育委員と社会教育委員の懇談については非常に大切なことだと思います。教育委員会の取り組みは、法律上公開しなければならないことになっており、外部評価も実施しております。その中で、各種審議会との意見交換についても言及されておりますが、社会教育委員との意見交換については、2年前に実施いたしました。なお、昨年度は図書館協議会、今年度は文化財保護審議会というように、1年ごとに順番に実施していることをご了解いただければと思います。教育委員との懇談等の機会については、非常に大切なことだと思いますので、実現できるようにとりはからって参りたいと考えております。

木村委員長：以上で、第3回目の社会教育委員の会議を終わります。

議事録は上記のとおりであることを認めます。

平成25年 4月11日

石狩市社会教育委員の会議 委員長 木村 純
